

『昔語質屋庫』

江戸後期の読本。五巻五冊。曲亭馬琴作・勝川春亭画。文化7年(1810)刊。質屋の庫にある道具類が、夜中にそれぞれの仮の姿を現わして身の上話をするという形で、著名な歴史上の事件や人物に独自の考証論評を加えたもの。小説の形を借りた一種の史談随筆であり、馬琴の歴史観を知る上で貴重な作品。

[参考文献]

昔語質屋庫；夢想兵衛胡蝶物語 / [曲亭馬琴著]；鈴木重三，徳田武編；汲古書院，2002.5

913.56/61/12 2002106388

曲亭馬琴集 下 近代日本文学大系16巻：国民図書株式会社，[大正15(1926)]

918.5/7/16A 0000031739

“おかしがたりしちやのくら【昔語質屋庫】”，日本国語大辞典，

JapanKnowledge, <http://japanknowledge.com>, (参照 2014-10-25)

昔語質屋庫①

第五 俵藤太龍宮入の弓袋

俵藤太 たわらとうた

藤原秀郷。平安中期の関東の武将。生没年不詳。将門を討った功により従四位下下野守などに任じられ、源経基、平貞盛らとともに軍事貴族として中央に進出した。子千晴が安和の変に座して中央からは後退するが、子孫は小山、足利、亘理の諸氏として北関東から東北地方に広まった。藤太は超人将門を倒した勇士として英雄視され、さまざまな伝説がつくり出された。室町時代になると、御伽草子の主人公として『俵藤太物語』（別名『俵藤太草子』）などに登場し、めざましい活躍を見せる。藤太は弓矢の名手としてその名を知られていたが、ある日近江国瀬田の唐橋の上に横たわる大蛇をおくせずにまたいで通ったことから、その大蛇に化身した竜神に武勇を見込まれ、大ムカデを退治することを懇望される。野洲郡の三上山を七巻きもする大ムカデに、藤太は弓矢を携えて挑む。しかし大ムカデは硬く、弓を射ても通らない。最後の一本に唾を付けて放ったところ、これが刺さり退治に成功した。（『日本怪異妖怪大事典』によれば、ムカデは唾をかけると死ぬといった俗信があった。）彼はその功により釣鐘、刀、鎧、切っても尽きぬ絹、食べても尽きぬ米俵（俵の名の由来というが、本来は田原庄の庄園名から）などを与えられたという。この物語は『俵藤太絵巻』などの絵巻にもつくられ、大いに世に流布した。

[参考文献]

日本怪異妖怪大事典 / 小松和彦 [ほか] 編集委員：東京堂出版，2013.7
388.1/Ko61 2013109836 “おかで【百足】”p. 535-536

“俵藤太”，新版 日本架空伝承人名事典，“俵藤太伝説”，日本大百科全書（ニッポニカ），JapanKnowledge，<http://japanknowledge.com>，（参照 2014-10-27）

昔語質屋庫②

蔣武

唐の宝暦年中、循州河源に蔣武(しょうぶ)という男があった。骨格たくましく、豪胆剛勇の生まれで、山中の巖窟に独居して、狩猟に日を送っていた。彼は蹶張(けっちょう)を得意とし、熊や虎や豹が、その弦音に応じて斃おれた。蹶張というのは片足で弓を踏ん張って射るのである。その鏃をあらためると、皆その獣の心をつらぬいていた。

ある時、甚だ忙がしように門を叩く者があるので、蔣は扉を隔ててうかがうと、一匹の猩々(しょうじょう)が白い象にまたがっていた。蔣は猩々がよく人の言葉を語ることを知っているので、内から訊いた。

「象と一緒に来たのはどういうわけだ」

「象に危難が逼って居ります。わたくしに人間の話が出来るといので、わたくしを乗せてお願いに出たのでございます」と、猩々は答えた。

「その危難のわけを言え」と、蔣はまた訊いた。

「この山の南二百余里のところに、天にそびゆる大きい巖穴がございます」と、猩々は言った。「そのなかに長さ数百尺の巴蛇(うわばみ)が棲んで居ります。その眼はいなずまのごとく、その牙はつるぎの如くで、そこを通る象の分類はみな吞まれたり噬まれたりします。その難に遭うもの幾百、もはや逃げ隠れるすべもありません。あなたが弓矢を善くするのを存じて居りますので、どうぞ毒矢をもってかれを射殺して、われわれのうれいを除いて下されば、かならず御恩報じをいたします」

象もまた地にひざまずいて、涙を雨のごとくに流した。

「御承知ならば、矢をたずさえてお乗り下さい」と、猩々はうながした。

蔣は矢に毒を塗って、象の背にまたがった。行けば果たして巖の下に二つの眼が輝いて、その光りは数百歩を射るのであった。

「あれが蛇の眼です」と、猩々は教えた。

それを見て、蔣も怒った。彼は得意の蹶張をこころみて、ひと矢で蛇の眼を射ると、象は彼を乗せたままではしり避けた。やがて巖穴のなかでは雷の吼えるような声がして、大蛇は躍り出たのたうち廻ると、数里のあいだの木も草も皆その毒気に焼けるばかりであった。蛇は狂い疲れて、日の暮れる頃にたおれた。

それから穴のあたりを窺うと、そこには象の骨と牙とが、山のように積まれていた。十頭の象があらわれて来て、その長い鼻であかい牙一枚ずつを捲いて蔣に献じた。それを見とどけて、猩々も別れて去った。蔣は初めの象に牙を積んで帰ったが、後にその牙を売って大いに資産を作った。

[参考文献]

青空文庫 中国怪奇小説集07 白猿伝・其他(唐)岡本綺堂より引用

http://www.aozora.gr.jp/cards/000082/files/1301_11897.html

昔語質屋庫③

第九 橘逸勢(たちばなのはやなり)薄命の一行物

たちばな - の - はやなり【橘逸勢】

平安時代前期の官人、能書家。空海、嵯峨天皇と共に三筆の一人。父は従四位下入居。延暦23年(804)、遣唐使に従って、空海・最澄らとともに留学。大同元年(806)帰朝。承和の初めごろ、従五位下となったが老病をもって官につかなかったという。承和7年(840)但馬権守に任ぜられた。同9年、承和の変の首謀者とされ本姓を剥奪、非人と改め伊豆国へ配流されたが、配送の途中に遠江国板筑駅において死没した。これが冤罪であった可能性は強い。嘉祥3年(850)、正五位下を追贈され本郷に帰葬することを許された。墓は姉小路北堀川東の地にあったという。仁寿3年(853)、さらに従四位下を贈られた。貞観5年(863)以来、中世に至るまで祟りを恐れた貴族たちによって御霊会の対象として祀られた。

本編の一行物は、逸勢の娘である妙冲尼(みょうちゅうに)の姿で父親の冤罪を訴えている。妙冲尼は、承和の変により、伊豆へ流罪となった父につきしたがった。途中、遠江(静岡県)で父が没すると、埋葬地に庵をおすんで尼となる。嘉祥3年帰葬をゆるされ、遺骨をだいて京都にかえた。

[参考文献]

“橘逸勢(たちばなのはやなり)”, 国史大辞典, “妙冲尼(みょうちゅうに)”, 日本人名大辞典, JapanKnowledge, <http://japanknowledge.com>, (参照 2014-10-28)

昔語質屋庫④

第十二 九尾の狐の裘(かわごろも)

玉藻前 たまものまえ

伝説上の美女。鳥羽法皇の寵姫玉藻前は、天竺と中国において、姪酒によって王を蕩かし、すこぶる残虐な所業や悪の限りをつくした果てに、日本に飛来した金毛九尾の狐の化身であった。この妖狐は、陰陽師安倍泰成に正体を見破られ、那須野に逃げるが射殺され、その霊は石と化して近寄る人や鳥獣を殺す殺生石になったという。のちに玄翁和尚の法力で、妖狐の精魂は散滅させられた。この九尾の妖狐の伝説は、日本の各地に残されたさまざまな伝説の中でも、舞台を天竺・中国・日本にひろげるスケールの大きなものである。中世においては、謡曲『殺生石』、物語や絵巻の題材となったが、金毛九尾の妖狐譚は、むしろ江戸期に入ってから大きく成長をみせた。高井蘭山の『絵本三国妖婦伝』(1804)や式亭三馬の『玉藻前三国伝記』(1809)をはじめとする小説、近松梅枝軒、佐川藤太による人形浄瑠璃『絵本増補玉藻前曦袂あさひのたもと』(1806)、鶴屋南北の歌舞伎『玉藻前御園公服くもいのはれぎぬ』(1821)などがある。

[参考文献]

“玉藻前 たまものまえ”，新版 日本架空伝承人名事典, JapanKnowledge, <http://japanknowledge.com>, (参照 2014-10-28)